

資本主義の発達が人類の成長を支えてきたことは歴史的な事実であり、お金持ちになりたい、誰よりも幸せになりたい、という「利己心」が経済活動のエネルギー源となって社会は発展してきた。私自身が企業家として歩んで来た道も、夢や希望を実現したいという強烈な欲望を爆発させることそのものであったし、今もこれが最大のエネルギーの源泉となっている。

したがって、競争というのは、単に勝者と敗者を決める争いではなく、それぞれが自分の欲望とエネルギーをぶつけ合うことで人間としての成長を目指しながら、同時に社会を引っ張っていくものだと考えている。もし仮に、競い合いが社会の成長とは無関係に進められるとすると、最後に残るのは一人の勝者と死屍累々の戦場であり、その先には夢や欲望やエネルギーがゼロの世界が荒涼として広がるだけになってしまふだろう。

見方を変えると、自己と社会の変革の原動力となるはずの「競い合い」が、利己的で社会を疲弊させる「奪い合い」に変質してしまったように私には思える。その大きな要因が、行き過ぎた市場原理主義とこの思想に寄りかかったどん欲な株主至上主義にあるのではないだろうか。

会社は株主のものであり、もっぱら株主の利益追求のために存在するという株主至上主義は、根本的に誤りだと思う。それは、株式会社の歴史的経過をたどれば分かることである。

資本主義という経済体制ができてくる過程を見ると、初めから株式会社があったわけではなく、お金を持った人々が資本という形で会社を作り、株式会社というしくみを広めながら社会経済を発展させてきた。さらにさかのぼると、己のためだけではなく社会そのものの発展を考えることによって、自分を含むより多くの人々の幸せを手に行けると考えてきた。つまりは、社会の発展に連れて権力の分化も進み、経済の面ではある程度お金を持った人々が株式を持つという形で権力を握っていたといえる。

したがって、株式会社制度には本来的に社会の発展を図る、社会の公益性を重視するという考えが内包されており、株主には経済の分野で社会の発展に関わる権力が負託されているのだと思う。この前提に立って「権力の分化」という面から資本主義の将来を考えてみると、やがて市民が権力を持つ日がやって来るのではないだろうか。「市民資本主義」とも呼ぶことのできる時代の到来を予言するとともに、